

和歌にみる京都西山の景物と場所のイメージ に関する研究 —領域性とその時代変化に着目して—

田中 棕¹・山口 敬太²・川崎 雅史³

¹学生会員 京都大学大学院 工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1)
E-mail: tanaka.ryo.87a@st.kyoto-u.ac.jp (Corresponding Author)

²正会員 京都大学准教授 工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1)
E-mail: yamaguchi.keita.8m@kyoto-u.ac.jp

³正会員 京都大学教授 工学研究科 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1)
E-mail: kawasaki.masashi.7s@kyoto-u.ac.jp

本研究は、和歌表現を通じて歴史的に形成された場所固有の景物と場所のイメージの特徴を、その領域性に着目して明らかにするものである。具体的には、京都西山を対象に、近世地誌・名所案内記類から抽出した和歌を、その表現や景物、場所の歴史的・社会的文脈に基づいて類型化し、和歌に詠まれた場所のイメージの特徴について考察を行った。また、イメージの類似性に着目して、場所ごとのイメージの関係性やそれらの時代変化を考察した。その結果、複数の場所間で高い類似性・共通性をもつ、イメージの領域的なまとまりが形成されていたことを明らかにした。また、この領域内において、時代を越えたイメージの継承や再形成が認められたことを明らかにした。

Key Words: landscape representation, literature, Kyoto, cultural tourism, regional landscape

1. 研究の背景と目的

近年文化観光の推進にみるように、地域固有の歴史・文化の理解に基づいた、文化的景観の評価や保全活用が進められている。地域資源の歴史的・文化的価値を適切に評価し、現代の地域づくりや景観形成に活用するための方法論が求められている。地域の歴史や文化の形成には様々な背景が想定されるが、特に京都においては、近世以前の和歌や名所が地域のイメージ形成に大きな影響を与えた。本研究では、和歌に詠まれた場所のイメージと歴史性や社会的文脈との関係の分析を通じて、歴史的に形成された場所特有の景物とイメージの特徴を明らかにするとともに、その分析手法を提案する。

名所は元々、和歌に多く詠み込まれた歌詞(歌枕)のなかの地名を指すものであった。ただし、ある地名が歌枕となるためには、単に和歌に詠まれるだけでなく、その場所の歴史的・社会的文脈やイメージを象徴する景物と取り合わされ、その結びつきが一般的な認識として共有されていることが必要であった^{1,2)}。そこで、本研究では、地誌や名所案内記にみる個々の場所が、和歌の中

でどのように固有の景物やイメージと結び付けられてきたか、に着目する。加えて、場所の歴史やイメージの共通性から、イメージの領域的な広がりについて考察を深める。このような和歌に詠まれた場所イメージの領域性の評価は、個別の場所のイメージにとどまらない、地域的なイメージの形成を理解する上で重要だと考えられる。

資料には近世地誌・名所案内記類を用いる。近世に数多く出版されたこれらの資料には、名所の縁起などに加えて古典となる和歌が示されるものが多く、近世の名所は歌枕としての特徴を残していると言える。しかし、近世の名所に関する既往研究には、紀行文を対象として鑑賞態度の多様性や時代変化を論じたもの^{3,4)}や、観光経路を分析したもの^{5,6)}、絵画の視点場や構図を分析したもの^{7,8,9)}などはあるが、和歌に詠まれた景物と場所のイメージの特徴を体系的に分析し、地域のイメージ形成を論じた研究の蓄積は十分でなく、また、その方法論についても未だ確立しているとはいえない。

本研究において分析の対象とするのは、西山連峰から桂川西岸を主とする旧乙訓郡¹⁰⁾および桂川東岸の鳥羽・八幡山周辺を含む範囲(以下、西山地域とする)で

ある(図-1)。京都西山地域は平安京の南西郊外に位置し、主要河川や街道が通る西国交通の起点であったことなどから、古代から遊獵地や寺社、水辺の離宮、貴族の山荘などが形成された。そのため、平安の皇族貴族らが郊外の自然を体感し文芸活動を行った地であり、豊かな歴史的・文化的背景を持ち、今も多くの名所旧跡が残されている。しかし、これまでに個々の名所旧跡を取り上げた研究はいくつか認められるものの^{10,11)}、西山全体を対象に、和歌にみるイメージを把握したものは管見では認められない。

以上を踏まえ、本研究は、近世京都の地誌・名所案内記を資料として用いて、和歌に詠まれた京都西山の景物と場所のイメージの特徴を、イメージの領域性とその時代変化に着目して明らかにすることを目的とする。

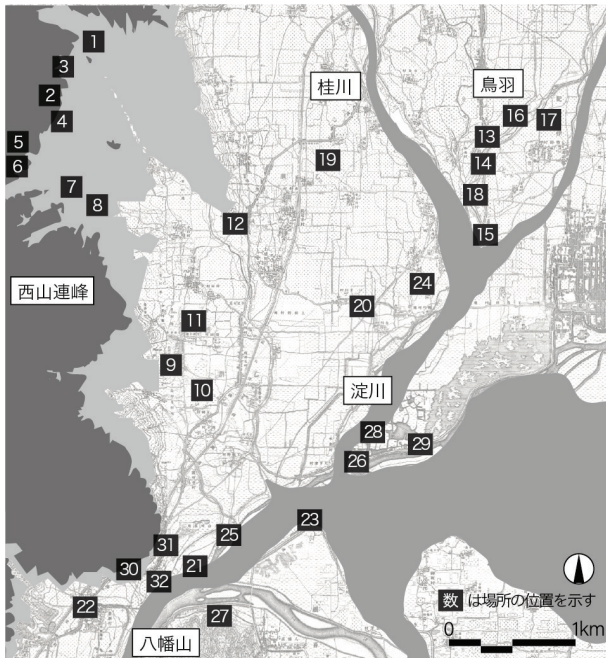


図-1 西山地域の範囲と対象とする場所の位置(国土地理院2万迅速図・仮製図を用いて筆者加工)

2. 研究の対象と方法

(1) 分析の対象

分析資料には、近世に刊行された京都の代表的な地誌・名所案内記類を収録した『新修京都叢書¹²⁾』のうち、西山地域の名所に関する和歌を複数掲載している12編の地誌・名所案内記類を用いた¹³⁾(表-1)。これらの記載内容は、資料ごとに記載上の特徴が認められるものの、概ね、a) 地名や名所旧跡ごとの縁起などの歴史的背景の説明、b) 過去に詠まれた名所に関わる和歌、c) 絵図、d) 著者自身の和歌や近世の様子に関する記述、に整理できる。イメージ分析においては、このうち、場所固有の景物やイメージに関する言語表現を読み取る事ができる、b) および d) の和歌・記述を主な分析対象とし、a) の情報を補足的に用いた。

各資料における、場所ごとの和歌・記述の記載数は表-1の通りである。ただし、本研究では、特に地域を代表する場所を対象とするため、12編の地誌・名所案内記のうち3編以上に、和歌あるいは近世の様子に関わる記述が認められる場所を対象とした。その結果、32箇所の地名・名所旧跡を抽出し、297首の和歌、12つの記述を得た¹⁴⁾。

(2) 分析の方法

和歌における地名と景物や場所のイメージの結びつきが詠み継がれ、歌枕として一般化すると、和歌表現にも類型的な特徴がみられるとされる¹⁵⁾。そこで、第一に地誌・名所案内記から抽出した和歌・記述に詠まれた景物および場所のイメージに関わる表現、場所固有の歴史的・社会的文脈を把握し、それに基づいて、和歌・記述の類型化を行う。具体的には、以下の手順で行った。

1) 全ての和歌・記述から、各表現の辞書的意味や和歌

表-1 地誌・名所案内記類の記載の有無と記載数^{*1)}

		場所		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
地誌・ 名所案内記類		勝持寺	大原野神社	大原野	小堀山	三軒寺	善峯寺	業金母塔	長岡	長岡天満宮	鞍岡	今里	向日明神	鳥羽殿跡	秋の山	芹川	鳥羽	竹田	城南神社	福田寺	羽束師の杜	狐川	水無瀬	美豆御牧	久我神社	淀川	淀	八幡山	大荒木の杜	浮田の杜	関戸明神	山崎	相応寺		
A	洛陽名所集	1658	山本泰順	2		5	2									3		2	1		1	1		4	4	2		3	11	2	3				
B	京童	1658	中川喜雲			6																							1				1		
C	出来齋土産	1677	浅井了意	2	1	6	1						1	1	4		1	1	1	2			4	5			4	6	3	4					
D	京師巡覧集	1679	釈丈愚			1	1	1				3	2			2	2	1	2	1	1	1	2		1		1	2	2	3	1	1			
E	菟芸泥赴	1684	北村季吟	1	3	1	3		2		3		1	1	3	2	3	4	3	2	1	1	2	1	4	2	2		6				2	3	1
F	京羽二重	1685	孤松子	1	1	1												1	1			1	1	1							1				
G	名所都鳥	1690	不詳	2		2	2									2	1		2		1	3		2	2	1	2		4	2	2				
H	山城名勝志	1711	大島武好	3	2	5	3	6	1		2		2	2	1	13	3	4	3	4	3		2	1	3	12	3	3	9	14	3	2	1	2	1
I	山州名跡志	1711	釈白慧	7		5	2	5	2	1	3		2	2	3	4	3	5	2	2	1	2	3		3	2	9	3	6	2	3	3		1	
J	都名所図会	1780	秋里籬島	2	1	4	1			0	1	2	1	1	3	1	2	3	3		1	1			2		3	1	8	1	3	4			
K	拾遺都名所図会	1787	秋里籬島			2		5		3		0	1			4		2	1	3	1				2		4	1	0	1					
L	都花月名所	1793	秋里籬島	1		1	1			0	1	0	1			4		1			1	1	1			2		3	3						
和歌・記述の合計 ²				13	8	19	12	14	5	4	5	2	4	3	10	20	12	10	16	8	5	3	4	2	10	22	5	19	17	38	12	10	3	5	1

^{*1)} 近世の様子に関する記述が認められないものは和歌数のみとし、認められるものは和歌数/記述数を示した。

^{*2)} 同じ場所について、複数の資料から同一の和歌が抽出できた場合は、重複を除いた。異なる場所で、同一の和歌が抽出できたものは、それぞれ数えた値を示した。

表現としての典型的な用例を『日本国語大辞典¹⁴⁾』『歌ことば歌枕大辞典¹⁵⁾』を用いて確認しつつ、景物および場所に対する特定のイメージが読み取れる表現を抽出した。

2) 資料に用いた近世地誌・名所案内記類の記載、および『京都市の地名¹⁶⁾』『京都府の地名¹⁷⁾』『歌ことば歌枕大辞典』を用いて、対象とする場所の歴史的・社会的文脈を把握した。

3) 和歌表現と場所との関係について論じた既往研究の知見を整理するとともに、1)および2)の手順で把握した、和歌表現と場所の歴史的・社会的文脈との関係を踏まえ、和歌にみる場所のイメージを整理する種類の検討を行った。

北住は、東北地方の歌枕を整理し、表現上の類型として、「名所に特定の景物が取合されるもので、ある種の観念を伴ふこともある」「地名が掛詞として使用され、ある種の観念を生ずるもの」「地名が縁語を伴ふもの」の3つの類型を示した¹⁸⁾。小町谷は北住の類型を引用し、そのうち景物との結びつきのある第一の類型を、歌枕が場所との関わりを具体的な形で持っているものとして取り上げている¹⁹⁾。同様に片桐も、地名に対して特定の人事に関わる観念が結びついたものと、地名との音声的な類似性によって別の語と結びついたものとに大別している²⁰⁾。すなわち、歌枕についての和歌表現として、その場所に関わる具体的な景物や事象と結びついたイメージと、地名に対する掛詞や縁語などの言葉の連想によって結びついたイメージとに大別できると考えられる。

また、佐々木は、ある地名が歌枕として成立するに至った要件として、主に「天皇の行幸」「神祇」「奏上された風俗歌」などを通して天皇らが地名と直接的間接的に関わりを持ち得たことを挙げ、歌枕の成立やイメージの形成とその場所の歴史的・社会的文脈とが強く関連していることを指摘している²¹⁾。

以上の知見を参照し、本研究では、場所とそのイメージや景物との間にどのような結びつきがあるかという観点から、(A) 寺社や離宮などの拠点・機能や、所縁のある故人に関わるイメージ、(B) 土地固有の自然環境や生活に関わるイメージ、(C) 地名からの連想に関わるイメージ、の類型を設けた。加えて、場所ごとに景物やイメージを整理する上で、眺望を通して異なる場所間での景物やイメージの取り合わせが認められたため、これを(D) 眺望に関わるイメージとし、計4つの類型とした。

4) 手順1), 2)で把握した、場所のイメージに関わる表現の類型の特徴や意味内容、場所固有の歴史的・社会的文脈との関連に基づいて、それぞれの和歌・記述が場所に対するどのようなイメージを詠んだものかを整理した。この時、まず場所ごとに、イメージが明確に読み取れる

和歌・記述から整理を始め、それらに類似する表現を持つ和歌・記述をまとめることで整理を行った。次に、異なる場所同士で、表現の特徴や場所の歴史性との関連が共通するイメージをまとめ、場所に対するイメージの類型化を行った。

次章では、場所固有の歴史的・社会的文脈とイメージとの関連や、景物との結びつきについて、4つのイメージの型ごとに考察した。整理したイメージとそれが読み取れる表現、主な景物、詠まれた場所などを表-2、表-3に示す。

次に、イメージの領域的なまとまりや相互関係、時代変化についての考察を以下の手順で行う。

1) 各場所の位置と整理したイメージを地図中に示した上で、イメージと詠まれた場所とを線で結び、イメージのネットワーク図を作成した。これにより、イメージの領域的なまとまりが認められる範囲を把握した。

2) まとまりが認められた範囲内において、3箇所以上の場所間に共通して詠まれたイメージ、および10首以上²²⁾の多くの和歌・記述に詠まれたイメージを、代表的なものとして取り上げ、それらを詠んだ和歌・記述数の時代変化を整理した。これをもとに4章では、景物やイメージの相互の関係や、その時代変化について考察した。

3. 型ごとの景物とイメージとの関係

(1) 拠点・機能や所縁のある故人に関わるイメージ

寺社や離宮などの拠点・機能、あるいはその所縁の人物に関わるイメージは、(A-1) 神仏信仰に関わるイメージ、(A-2) 上皇らへの栄華の賛辞・追慕に関わるイメージ、(A-3) 国界での旅情に関わるイメージ、(A-4) 隠棲した故人に関わるイメージ、に大別できた(表-2)。

(A-1) 神仏信仰に関わるイメージのうち、神への信仰のイメージは、神社とその周辺の野山で認められた。代表的なものとして、石清水八幡宮のある八幡山では和歌35首と近世の様子に関わる記述1つに、大原野神社およびその周辺の大原野、小塩山では合わせて14首の和歌に神への信仰のイメージが認められた。これらは、大原野神社では「大原」「小塩山」、八幡山では「八幡山」「男山」「石清水」などを歌枕として詠まれており、山との関わりが読み取れる。「神のめぐみ」「神のしるし」といった神への信仰や加護のイメージに関わる表現に加えて、紀貫之の歌「大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千世の陰みん²³⁾」のように、加護を受けた皇族貴族の長寿・繁栄の願いに関わる表現も読み取れる。王城鎮護のために勧請された神社であり、多くの行幸が行われ国家や天皇家の長久を祈る歌が詠まれたことで、神威

表-2 (A) 拠点・機能や所縁のある故人に関わるイメージの類型と景物や表現の特徴

イメージの型	イメージ	主な歌枕*1	主な景物*1	イメージが読み取れる代表的な表現*2	場所	数
(A) 拠点・機能や所縁のある故人に関わるイメージ						
(A-1) 神仏信仰に関わるイメージ	八幡山への信仰	石清水 12, 男山 8, 八幡山 7	山 14, 月 12, 水 11, 川 4, 松 4, 人 3, 雲 3, 風 2, 鳩 2, 花 2, ...	【長寿, 永続の意味を持つ表現】 万世/千世 【神の存在や加護を示す表現】 神垣/しめの内, 神のめぐみ/神慮のめぐみ/神の心/神のひかり 【垂迹の意味を持つ表現】 跡垂れそめし	八幡山	35/1
	大原野神社への信仰	大原 10, 小塩山 9	山 8, 松 7, 時鳥 1, 木枯し 1, 梢 1, 朝霜 1, しらゆふ 1, 風 1, 若菜 1, 野 1	【歴史の深さを示す表現】 神代 【長寿の意味, イメージを持つ表現】 千代/千歳, 小松原/姫小松 【神の存在を示す表現】 神, 神のしるし	大原野神社, 小塩山, 大原野	14
	向日神社への信仰	向日 2	露 1, 霜 1, 雨 1	【神やその加護に関わる表現】 神/明神, 祈る/たのむ	向日神社	3
	城南神社への信仰	-	都 1, 山 1, 夜 1, 月 1	【神やその加護に関わる表現】 神の恵, しめの内, 祈る	城南神社	3
	仏教的厭世	大原 2	山 7, 月 6, 里 3, 宿 3, 花 2, 雲 2, ...	【人事を厭う意味を持つ表現】 浮世/憂し心のやみ 【浄土のイメージを持つ表現】 西へ行く月, 紫の雲 【脱俗的な場所を指す表現】 山に入らん, 草深き	小塩山, 大原野, 勝持寺, 三鈷寺, 善峯寺	16
(A-2) 上皇らへの栄華の賛辞・追慕に関わるイメージ	鳥羽殿の盛衰	鳥羽 4, 鳥羽田 2	月 4, 山 4, 里 3, 松 3, 花 3, 田 3, 桜 2, 池 2, 宿 2, 菊 2, 露 2, ...	【主君への敬意を指す表現】 君/君が世 【長寿, 永続の意味を持つ表現】 千歳/千年/千世 【離別や衰退の悲しみを指す表現】 別れ/かなし, 南北の景色またいみじき離宮たりし, 気うとし	鳥羽殿跡, 秋の山, 鳥羽	21/1
	過去の行幸の追慕	芹川 5	川 5, 山 2, 道 2, 風 1, 野 1	【行幸があったことを示す表現】 みゆき 【過去の慣習を指す表現】 古き流れ/いにしへの流れ, 絶えせぬ	芹川	5
	水無瀬殿の盛衰	水無瀬 1	川 1, 霞 1	【長寿, 永続の意味を持つ表現】 万代, 霞の洞	水無瀬	1
(A-3) 国界における旅情に関わるイメージ	旅情・別れ	淀 1, 美豆 1	夜 3, 月 2, 都 2, 梢 1, 宿 1, 人 1, 霧 1, 草 1, 駒 1	【旅情のイメージを持つ表現】 旅/旅の空/旅の月, 草枕, 幾夜 【離別の悲しみを指す表現】 ものうげ, 別, かへりみし	淀, 美豆御牧, 関戸明神, 山崎	6
(A-4) 隠棲した故人に関わるイメージ	在原業平由来の景物	-	宿 2, 律 1, 落穂 1, 田 1, 尾花か油 1, 秋の花妻 1	【荒廃のイメージを持つ表現】 荒れ/鬼のすだく 【別れや懐古を持つ表現】 別れ, 懐旧の和歌をよみ	業平母塔, 長岡	5/1
	西行由来の景物	-	桜 4, 花 1, 東風 1	【西行を懐古・踏襲する表現】 西行/西行の霊を慰むる, あはれ	大原野, 勝持寺	4/1
	俊恵由来の景物	板井の清水 3	水 3, 月 1	【俊恵を踏襲する表現】 みくさゐる	福田寺	3
	菅原道真由来の景物	-	梅 2, 宿 1	【菅原道真を懐古する表現】 菅神風流を好みたまふ神慮	長岡天満宮	1/1

和歌/風景記述の総数 117/5

*1 数字は、その歌枕・景物を詠んだ和歌・記述の数を示す。種類が多い場合は数の多いものを 10 種以内で示し、半数以上の和歌・記述に認められた歌枕・景物は網掛けで示した。
*2 特に明確なイメージが読み取れるものは網掛けで示し、イメージが類似する表現は/で整理した。

や慶賀の思いが場所と強く結びついたものと言える²³⁾。特に大原野神社は、藤原氏の氏神である春日社から勧請した分祀であるため²⁴⁾、藤原氏に対する慶賀のイメージが詠まれていた。こうしたイメージが詠まれた景物として、大原野神社周辺では山や松、八幡山では山や水、月、松が多く認められた。この月や松は神の存在や威光、長寿繁栄を象徴する景物であった²⁵⁾。

一方、仏教信仰や仏教的な厭世に関わるイメージは、三鈷寺や善峯寺、勝持寺、大原野、小塩山といった、西山の山麓に位置する寺院やその周辺の野山で認められた。三鈷寺の和歌では「浮世を侘ぶる」と厭世的な意味の表現や、「西へ行く月」を慕って西山へ隠棲する、浮世の中で心を晴らす頼みとするといった、厭世的なイメージを持つ表現が認められた。景物として多く詠まれた月は、神仏の存在を象徴するほか、精神の浄化や慰藉につながる景物であったことが指摘されている²⁶⁾。三鈷寺に隠棲した慈円が「さとりなはつゐの友とや都いでて我いる山

に月もいるらん²⁷⁾」と、自身が隠棲する三鈷寺を悟りの場として詠んだように、実際に隠棲した仏教者あるいはその周辺の人物がその場所での厭世や悟りの思いを歌に詠むことで、厭世の地かつ精神の浄化の地として、場所とイメージとの結びつきが形成されたと考えられる。

次に、鳥羽殿跡およびその周辺の秋の山、鳥羽や、水無瀬殿があった水無瀬²⁸⁾、行幸地であった芹川では、

(A-2) 離宮と関わりの深い上皇らや行幸を行った上皇らへの栄華の賛辞や追慕の思いを詠んだ和歌が多く認められた。鳥羽殿跡や水無瀬周辺では、主君への敬愛の意味を含んだ「君」「君が代」といった表現や、治世の長久や長寿のイメージを持つ「千歳」「万世」などの表現が認められた。鳥羽殿跡では景物に月が詠まれたが、ここでは「池水にこよひの月をうつしても心のままにわがものと見る²⁹⁾」のように、治世や願望を象徴する景物として詠まれている。離宮は上皇らの存在と強い結びつきがあり、その権力や治世のイメージを象徴する場所であ

った²⁹⁾。その一方で、「別れ」「かなし」といった離別の悲しみを詠む表現なども認められた。時代が降るとともに上皇らの崩御や南北朝の内乱に伴う兵火を経て³⁰⁾、敬愛した上皇らを悼み往時を追想する思いが詠まれた。近世地誌にも、「年ふり時うつり。みなすかれて田となり。水あふれて沼とな」となって往時の面影を失った近世においても、「まさしく法皇の離宮のあととなれ」と³¹⁾、かつての離宮の姿を追慕する表現が認められる。

また、芹川では、過去の慣習を指す「ふるき流れ」などの表現や、「みゆき」が行われたことを示す表現が認められた。嵯峨天皇が芹川野に行幸した慣例にならって、光孝天皇も芹川行幸を行ったとされ、伝統ある行幸地としてのイメージがあったことが読み取れる。

また、河内や摂津との国界に近い山崎や、関戸明神、淀、美豆御牧は、山城盆地を囲む連山がなす狭窄部であり、主要河川や街道が集まる陸舟運の要衝かつ西国交通の玄関となっていたことから、(A-3) 旅情に関わるイメージが認められた。「旅の空」「草枕」などの旅情のイメージを持った表現を用いて、旅路を憂いた羈旅歌や別れの悲しみを詠んだ離別歌が5首認められた。景物には、「草枕ほとはへにける都出て幾夜か旅の月にねぬらん³²⁾」のように、月や夜などが詠まれたが、ここでの月は旅路を照らす月であり、旅情のイメージと結びつけられた。

(A-4) 隠棲した故人に関わるイメージを詠んだ和歌が認められた場所として、勝持寺や大原野、長岡、業平母塔、福田寺、長岡天満宮があげられる。長岡や業平母塔では、『伊勢物語』の長岡に住んだとされる在原業平とその母とされる人物が登場する「さらぬ別れ」「色好みなる男」の歌が取り上げられた。その他の場所でも同様に、「花見にとむれつつ人のくるときはあたは桜の咎にぞありける³³⁾」のように、喧騒を厭う故人らが詠んだ風流な生活のイメージやその景物を取り上げ、懐古・踏襲する表現が詠まれた。また、近世の様子に関わる記述からは、「むかしを感じ、懐旧の和歌をよみてすぎ行くもおほかりき³⁴⁾」と、故人の風流な生活のイメージを追体験する態度が読み取れた。長岡天満宮でも、境内に梅をはじめとする様々な景物が認められることを示し、「すべてこの地は閑静にして、風色の真妙他に勝れり。これなん菅神風流を好みたまふ神慮ここに現れ³⁵⁾」と、菅原道真が好んだ風流なイメージを踏襲したことを指す表現が認められる。

以上のように、離宮への行幸や寺社での信仰・隠棲、離京などの、場所特有の営為や活動に関わるイメージが歌に詠まれることで、和歌表現における場所のイメージとして定着していた。そのため、場所の歴史的・社会的文脈との強い関連を読み取ることができ、また、イメージを象徴する景物との結びつきも強く認められた。

(2) 土地固有の自然環境や生活に関わるイメージ

(B) 自然環境や生活に関わるイメージを詠んだ和歌は叙景的な表現が多く、土地固有の自然環境に応じた動植物や民衆の生活に関わる事物などが景物として詠まれた。自然環境や生活は場所ごとに明確な区切りがあるわけではないが、詠まれた景物や表現から、(B-1) 水辺の自然環境や生活に関わるイメージ、(B-2) 山辺の自然環境や生活に関わるイメージ、(B-3) 特定の寺社や離宮の景物に関わるイメージ、に大別できた(表-3)。

(B-1) 水辺の自然環境や生活に関わるイメージの代表的なものとして、まこもやあやめ草といった水辺の植物や月などの川辺の景物を詠んだ歌が認められた。これらの景物は、「まこもかる」「刈りて干す」のように水辺の植物に関わる習俗や民衆の営みを示す表現を伴い、また、「川なみ白き」のように川の流れの様子を示す表現とともに詠まれた。川に近く低湿地で、川の流れの様子や川辺の植生と密接な関わりがあったことがわかる。このような自然環境が淀川などに沿って連続的に広がっていたため、淀や美豆御牧、水無瀬など、多くの場所で共通する特徴が認められたものと考えられる。鳥羽や竹田周辺も同様に水辺に近い場所であるが、鳥羽田を歌枕とし、田や早苗といった田園に関わる景物が多く認められ、景物や表現に差異が認められた。

また、植物だけではなく、船などを景物として舟運に関わる習俗を詠んだ和歌や、水郷などの里人の生活を詠んだ和歌も認められ、「舟おとす淀の河瀬の朝きりにたえたえみゆる岸のかち人³⁶⁾」のように、土地固有の自然環境と結びついた生活の様子が詠まれた。近世に城下町や宿場町となった淀や八幡山などでは、「山下に民家十余町あり。この辺都会の地にして商家多し³⁷⁾」といった町の様子についての記述が認められた。

(B-2) 山辺の自然環境や生活に関わるイメージでは、それぞれの山に特有の景物や表現の特徴が認められた。大原野や小塩山では、山や松を景物として、野山の木々や冷え込みの厳しさが詠まれた。「をしほ山松風さむし大原やさえ野の沼やさえまさるらむ³⁸⁾」のように、「小塩山」「大原」「冴野の沼」などの周辺のいくつかの歌枕を組み合わせた歌も認められ、大原野や小塩山周辺で広く共通して野山の自然が詠まれた。鳥羽でも、松や白鳥などを景物として山の景物を詠んだ和歌が認められたが、飛羽山(とば山)と「飛ぶ」とを掛けて「白鳥のとば山」と詠むなど、鳥羽特有の場所と景物の結びつきが認められる。ほかにも、水無瀬では、歌枕「水無瀬山」に、鹿の声や涙などの寂しさの象徴する景物を取り上げて閑寂な秋の野山のイメージが詠まれるなど、それぞれ自然環境に固有の景物や表現の特徴が認められた。

また、長岡天満宮や山崎の宝寺、鳥羽殿では、(B-3) 寺社の境内や離宮の庭園の景物が取り上げられ、美しさ

表3 (B)～(D)のイメージの類型と景物や表現の特徴

イメージの型	イメージ	主な歌枕 *1	主な景物 *1	イメージが読み取れる代表的な表現 *2	場所	数
(B) 土地固有の自然環境や生活に関わるイメージ						
(B-1) 水辺の自然環境や生活に関わるイメージ	川辺の景物	淀 20, 美豆 15, 浮田 5, 淀川 4, 水無瀬 2, 八幡山 1, 大荒木 1, 男山 1, 久我 1, 山崎 1	野 14, 川 14, まこも 8, 人 8, あやめ 6, 月 6, 五月雨 5, 草 5, 駒 5, …	【川辺の植物に関わる習俗を指す表現】 まこもかる/刈り干す/早苗とる/ひけるあやめ 【川の様子に関わる表現】 川なみ白き/霞流るる淀の川波	浮田の杜, 水無瀬, 狐川, 美豆御牧, 久我神社, 淀川, 淀, 八幡山, 山崎, 相応寺	48
	田園地帯の景物	鳥羽田 8, 竹田 5, 芹川 4, 鳥羽 3, 伏見 2	田 14, 風 4, 早苗 4, 川 4, 若菜 3, 山 3, 露 2, 霧 2, 雨 2, 鶴 2, …	【空間・眺望の広さを意味する表現】 見え渡る/見渡せば/行末とほき 【秋のイメージを強調する表現】 露しげき/露にみだるる, 鹿のね	鳥羽殿跡, 秋の山, 芹川, 鳥羽, 竹田, 城南神社	20/1
	水郷の景物	竹田 4, 鳥羽田 3, 芹川 1	田 6, 里 5, 夜 4, 山 2, 風 2, 月 2, 車 2, …	【里の夜の様子を指す表現】 衣打つ/打つ衣, 幾夜/旅寝	秋の山, 芹川, 鳥羽, 竹田	8
	舟運に関わる景物	淀 14, 美豆 4, 久我 1, 水無瀬 1	船 14, 川 6, 人 6, 五月雨 4, 渡 3, 橋 3, 霧 2, 里 2, 野 2, …	【舟運に関わる習俗を指す表現】 渡る/渡し/渡り, 引く人/かち人/縄手引く	美豆御牧, 久我神社, 淀川, 淀, 水無瀬, 山崎	19/1
	近世都市の景物	淀 1	燈 1, 橋 1, 月 1, 水車 1, 茶亭 1, 民家 1, 商家 1	【都市としての様相を指す表現】 この辺都会の地/美麗なり	大荒木の杜, 淀, 八幡山	2/2
(B-2) 山辺の自然環境や生活に関わるイメージ	大原野周辺の野山の景物	小塩山 12, 大原 11, 瀬和井 4, 野野の沼 3	山 10, 松 5, 水 4, 沼 3, 風 2, 雪 2, 野 2, 桜 2, 紅葉 2, 里 2, …	【野山の冷え込みを強調する表現】 夜を寒み/冬寒み/冴えまさる 【遊猟に関わる表現】 野への御幸/かりにはあらで	大原野神社, 大原野, 小塩山, 勝持寺, 善峯寺	22
	向日の山辺の景物	向日 4	山 4, 月 2, 日 1, 薄紅葉 1, 風 1, 鹿 1, 駒 1, 野 1, 森 1, 時鳥 1	【月や日を指す表現】 タづく日, 月立ちて 【寂しいイメージを持つ表現】 さびし, 偲ばん	向日明神	4
	鞆岡の景物	鞆岡 4	笹 4, 岡 3, 舎人 2, 露 1, 雪	【植生を示す表現】 しげき笹生/笹の葉したり	鞆岡	4
	鳥羽山の景物	鳥羽山 2	山 3, 松 3, 白鳥 2, 月 2, 人 1, 風 1	【松と待つを掛けた表現】 松のまちつつ/松のねをのみぞなく 【飛羽(とば)に掛けた表現】 白鳥のとば山	鳥羽, 秋の山	3
	水無瀬の山辺の景物	水無瀬 3	山 3, 鹿 3, 木の葉 1, 草 1, 露 1, 林 1, 紅葉 1	【寂しいイメージを持つ表現】 鹿の声/鹿の妻こふ涙	水無瀬	3
	杜の景物	大荒木 4, 久我 3, 浮田 2	森 9, 紅葉 3, 田 2, 月 2, 草 2, 人 2, …	【杜の木々の様子を指す表現】 木々にはふ/木にはふ, 紅葉してけり/紅葉あへぬか	浮田の杜, 大荒木の杜, 久我神社	9
	山里の景物	長岡 3, 今里 1, 向日 1	里 4, 岡 3, 田 2, …	【荒廃や懐古の意味を持つ表現】 荒れ, 昔をかけて 【里の様子を指す表現】 田づらの庵, 山里, 鳴の羽搔き	長岡, 今里, 長岡天満宮, 向日明神	5
(B-3) 特定の寺社や離宮の景物に関わるイメージ	鳥羽殿の庭の景物	小野 1	露 1, 雪 1, 萩 1, 卯の花 1, 里 1, 人 1	【日の経過を指す表現】 日数も積りぬる, 朝な朝な	鳥羽殿跡	3
	長岡天満宮の景物	-	池 2, 紅葉 2, 桜 1, 風 1, 魚 1	【境内の美しさを指す表現】 美麗/風景いちじるし	長岡, 長岡天満宮	0/3
	宝寺の景物	淀 1, 宝寺 1	花 1	【境内の景物を指す表現】 咲花や	山崎	1
和歌/風景記述の総数						151/7
(C) 地名からの連想に関わるイメージ						
(C-1) 一般名詞が地名化する過程で定着したイメージ	古い・孤独に関わる地名	大荒木 8, 浮田 2	森 7, 草 5, 人 1, 駒 1, 木 1, 猿 1, 雪 1, 野 1, 竹 1	【目立たないものというイメージを持つ表現】 杜の下の草/下なる草	浮田の杜, 大荒木の杜	8
	恋に関わる地名	水無瀬 3	川 3, 船 1, 水 1, 人 1	【地表水の無い川に掛けた定型的表現】 下に流れて, 結ばぬ水, 有て	水無瀬	3
	男に関わる地名	男山 1	女郎花 1, 山 1	【男山に対して「女」を含む景物】 女郎花	八幡山	1
(C-2) 地名に修辭的に付加されたイメージ	美豆からの恋の連想	美豆 2, 淀川 1, 淀 1	森 2, 川 1	【地名「美豆」に掛けた恋に関わる表現】 見つる/君を見つる	美豆御牧, 淀川	2
	浮田からの恋の連想	浮田 1	森 1, 呼子鳥 1	【「憂し」を掛けた表現】 逢事のなきを浮田	浮田の杜	1
	狐川からの恋の連想	狐川 1	川 1, 人 1	【人を惑わすイメージを持つ表現】 人の心の狐川	狐川	1
	恥を連想する地名	羽束師 4	森 4, 風 1	【恥に関わる表現】 身をはづかし, 数ならぬ	羽束師の杜	4
	老いを連想する地名	男山 1	山 1	【男, 山, 栄えのイメージを掛けた表現】 さかゆく	八幡山	1
和歌/風景記述の総数						21/0
(D) 眺望に関わるイメージ						
	向日・今里への眺望	今里 2, 向日 2, 鳥羽田 1, 鳥羽 1, 伏見 1, 八幡山 1	里 3, 山 2, 風 1, 村雨 1, 松 1, 早苗 1, 雨 1, 雲 1, 時鳥 1	【遠望や空の景物を取り上げる表現】 遠の, 烟たなびく/雲ぞかかれる	今里, 向日神社	4
	宇治山への眺望	宇治山 2	山 2, 庵 2, 都 1	【眺望に関わる表現】 ながむる方 【宗教的なイメージを持つ表現】 ひつじさる, 宇治山	三鈷寺	2
	淀の舟運への眺望	小塩山 1, 淀 1	船 1, 霧 1, 川 1, 山 1	【眺望に関わる表現】 ふもとの霧のたえま	小塩山	1
	大江山への眺望	大江山 1, 鳥羽田 1	山 1, 月 1, 田 1, 雁 1	【眺望に関わる表現】 かたぶく月, 面におつるかりがね	鳥羽	1
和歌/風景記述の総数						8/0

*1 数字は、その歌枕・景物を詠んだ和歌・記述の数を示す。種類が多い場合は数の多いものを10種以内で示し、半数以上の和歌・記述に認められた歌枕・景物は網掛けで示した。

*2 特に明確なイメージが読み取れるものは網掛けで示し、イメージが類似する表現は/で整理した。

やそれらを眺め明かす日々を詠んだ歌が認められた。

以上のように、明確なイメージが読み取れる表現は少ないものの、場所固有の自然環境や生活を背景として、いくつかの場所に共通する景物や表現の特徴が認められた。

(3) 地名からの連想に関わるイメージ

(C) 地名からの連想に関わるイメージは、(C-1) 一般名詞が地名化する過程で定着したイメージ、(C-2) 地名に修辭的に付加されたイメージ、に分けられた(表-3)。言葉の上での連想に基づいて、地名ごとに特有のイメージとの結びつきが認められるため、複数の場所に共通して類似のイメージが認められることは少なかった。

大荒木や水無瀬は、元はそれぞれ、貴人の遺体を仮に置いておく殯(あらき)、水が伏流し地表が涸れた川、を指す一般名詞であったものが地名として定着したとされる^{39),40)}。こうした一般名詞としての意味をふまえて、大荒木の杜では、目立たない役立たないものというイメージを持つ「杜の下草」などの表現を用いて、老いや孤独のイメージを詠んでいる。また、水無瀬では、「下に流れて」などの定型的な表現を用いて、地表を流れない川の水に忍ぶ恋への思いを例えるなど、恋に関わるイメージが詠まれた。

(C-2) 地名に掛詞などの修辭によって付加されたイメージは、地名と同音の語や、地名から連想される語を掛け、その意味やイメージを重ねる表現が認められた。例えば美豆御牧では、「淀川のむかひにみつるみつの杜よそにのみして恋渡る哉⁴¹⁾」のように、「みつ(美豆)」と「見つ」や「水」などが掛けられ、恋のイメージが詠まれている。また、羽束師の杜では、「恥づかし」がかけられ恥や謙遜の思いが詠まれた⁴²⁾。これらは、地名に対して言葉の類似性から結びついた表現であるため、具体的な景物やその様子が読み取れる表現は少ない。

(4) 眺望に関わるイメージ

(D) 眺望に関わるイメージは、小塩山や三鈷寺、今里、向日神社、鳥羽で認められ、眺望を通して遠方の景物が詠まれることで、異なる場所間の景物やイメージが取り合わされた(表-3)。

小塩山や三鈷寺では山上から俯瞰する眺望が詠まれたほか、向日神社や今里、鳥羽では盆地である鳥羽や伏見から山辺を向いた遠望が詠まれており、広大な平地と周囲の山との間に双方向的な眺望が詠まれた。小塩山上から淀の舟運の景物が詠まれたように、眺望を通して、遠地の景物が取り合わされた。また、三鈷寺で「此庵はわが故郷のひつじさるながむる方は宇治の山もと⁴³⁾」と詠まれた和歌は、その左注に「西山往生院より眺望には宇治伏見鳥羽院等也」と広大な眺望があることを示すが、

そのなかでも喜撰法師が「憂し山」と掛けた宇治山を取り上げている。これは、三鈷寺の厭世地としてのイメージと宇治山の厭世的なイメージとを眺望を通して取り合わせたものと考えられる。

以上のように(D)眺望に関わるイメージでは、眺望を通して、離れた場所の景物やイメージとの取り合わせが認められた。

4. イメージの領域的まとまりと時代変化

3章では景物とイメージの特徴を類型化したが、本章では、それぞれの場所固有の景物やイメージに相互にどのような関係があり、またそれが時代とともにどのように変化したかを整理・考察する。1)地図上に各場所の位置を示した上で、2)3章で整理したそれぞれのイメージを、イメージの類型と和歌・記述数によって色と大きさを区別した円形を用いて描画した。その後、3)描画したイメージと、それらが詠まれた各場所とを直線で結び、イメージのネットワーク図を作成した。その結果、(1)大原野周辺、(2)長岡周辺、(3)鳥羽周辺、(4)淀・八幡山周辺、のそれぞれにおいて、一部の近接する場所間で共通するイメージが認められた(図-2)。すなわち、これらの場所の範囲におけるイメージの領域的なまとまりを把握した。

以下では、それぞれのまとまりにおける代表的なイメージとして、近接する3つ以上の場所に共通するイメージおよび、10首以上の多くの和歌に詠まれたイメージを取り上げ、それらのイメージの歴史的・社会的文脈や、景物やイメージの相互の関係、その時代変化について考察する。表-4には、代表的なイメージについて、時代ごとの和歌・記述数の変化と主な特徴を整理した^{44),45)}。

(1) 大原野周辺

大原野周辺の、大原野神社、小塩山、大原野、勝持寺、三鈷寺、善峯寺では、(A-1)大原野神社への信仰、

(A-1)仏教的厭世、(B-2)野山の景物が、3つ以上の場所で詠まれた代表的なイメージとして認められた。

平安遷都後すぐに平安城守護として、藤原氏の氏神である春日社から大原野神社を勧請したことで、9世紀から既に(A-1)大原野神社への信仰や藤原氏への慶賀を詠んだ和歌が、大原野神社、小塩山、大原野で認められた。これらの和歌には「小塩山」「大原」といった地名が既に歌枕として共通して認められ、早くから地名と神威や藤原氏に対する慶賀のイメージとの結びつきが形成されていたことがわかる。特に10世紀以降、(B)野山の景物を詠んだ和歌も認められるようになり、松や山といった景物との結びつきも強く認められる。大原野は恒

武天皇以降、歴代天皇が野行幸を行った場所であり、神社だけでなく野山に触れる機会があったことで、野としてのイメージが和歌に詠まれたものと考えられる。ただし、遊獵そのものを詠んだ和歌はなく、「をしほ山松風さむし大原やさえ野の沼やさえまさるらむ⁴⁴⁾」のように、「小塩山」「大原」を歌枕、山や松を景物として、「冴え勝る」ような冷え込みの厳しい山深い野としてのイメージが詠まれた。同じ歌枕と景物に、神への信仰のイメージと野山のイメージの両方が結びついていたことがわかる。

(A-1) 仏教的厭世のイメージを詠んだ和歌は、10世紀にも2首認められるが、特に12~14世紀に三鉢寺で多く詠まれた。天台宗・浄土宗僧であり、歌人でもある慈円や慈道、蓮生らによる詠歌が多く、彼らが入寺し隠棲の思いを歌に詠んだことで、厭世地・精神浄化の地としてのイメージが定着したと言える。特に三鉢寺や善峯寺は都の西方の山麓にある寺院であり、和歌にも「西へ行く月」のように西方であることを意識した表現が認められることから、西方浄土のイメージを重ねていたと考え

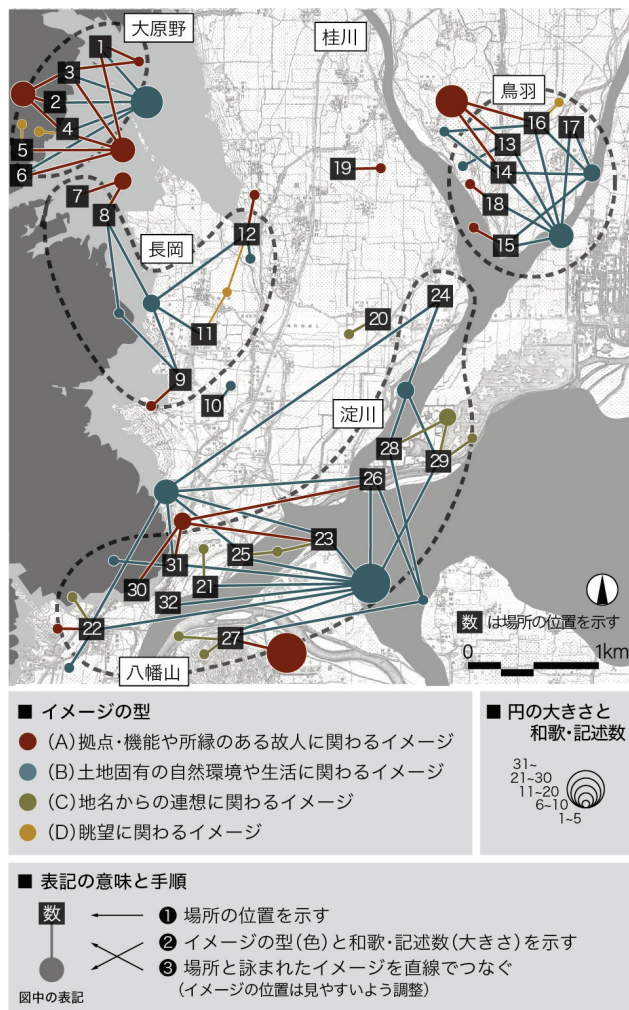


図-2 和歌にみる場所のイメージのネットワークと領域的なまとまり (国土地理院2万迅速図・仮製図を用いて筆者加工)

られる。また、13世紀の承久の乱以降には、名高い法親王らが住持として善峯寺に隠棲した⁴⁵⁾。そのうちの一人である慈道が、法親王を指す「竹の園」という表現を

表4 代表的なイメージを詠んだ和歌・記述数の時代変化

大原野周辺		世紀	8 th	9 th	10 th	11 th	12 th	13 th	14 th	15 th	16 th	17 th	18 th
【仏教的厭世】	1 勝持寺	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0
	3 大原野	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4 小塩山	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	5 三鉢寺	0	0	1	0	5	5	1	0	0	0	0	0
	6 善峯寺	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	0	0
	景物(山,月など)	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【大原野神社への信仰】	2 大原野神社	0	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	3 大原野	0	2	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0
	景物(山,松など)	0	2	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0
	歌枕(小塩山,大原)	0	2	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0
【野山の景物】	1 勝持寺	0	0	1	2	1	1	0	0	1	1	0	0
	2 大原野神社	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	3 大原野	0	0	2	2	1	2	1	0	0	0	1	0
	4 小塩山	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	1	0
	6 善峯寺	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	景物(山,松など)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
【長岡周辺】	8 長岡	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0
	9 長岡天満宮	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	11 今里	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	12 向日明神	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
【鳥羽周辺】	13 鳥羽殿跡	0	0	0	3	9	4	0	0	0	0	0	0
	14 秋の山	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	2	0
	16 鳥羽	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
	13 鳥羽殿跡	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	14 秋の山	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0
	15 芹川	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0
【田園地帯の景物】	16 鳥羽	0	0	0	1	2	2	1	0	0	1	2	0
	17 竹田	1	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0
	18 城南神社	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
	14 秋の山	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
【水郷の景物】	15 芹川	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	16 鳥羽	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0
	17 竹田	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0
	14 秋の山	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
【淀・八幡山周辺】	27 八幡山	0	1	2	1	10	14	2	1	0	2	1	0
	景物(山,月水など)	0	1	2	1	10	14	2	1	0	2	1	0
	歌枕(八幡山,男山,石清水)	0	1	2	1	10	14	2	1	0	2	1	0
	23 美豆御牧	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
【旅情・別れ】	26 淀	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	30 関戸明神	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	31 山崎	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	22 水無瀬	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
【舟運に関わる景物】	23 美豆御牧	1	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0
	24 久我神社	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	25 淀川	0	0	0	1	1	2	3	0	0	0	1	0
	26 淀	0	0	0	1	1	1	1	2	0	0	0	0
【近世都市の景物】	31 山崎	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	26 淀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	27 八幡山	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	28 大荒木の杜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
【川辺の景物】	21 狐川	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	22 水無瀬	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	23 美豆御牧	0	0	2	3	2	6	1	0	0	1	0	0
	24 久我神社	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
【社の景物】	25 淀川	0	0	2	1	2	3	2	0	0	0	1	0
	26 淀	1	0	2	2	1	1	0	1	0	2	0	0
	27 八幡山	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	29 浮田の杜	0	0	0	0	2	1	1	0	0	1	0	0
【杜の景物】	31 山崎	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	32 相応寺	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	24 久我神社	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	28 大荒木の杜	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0
【浮田の杜】	29 浮田の杜	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
	29 浮田の杜	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0

用いて「伝えこし代々の跡をも尋ねみつ竹の園生のにほの白ゆき⁴⁶⁾」と詠むように、特定の地名が直接和歌に詠み込まれることは少なかったものの、歴代の法親王らが隠棲した場所としてのイメージが詠み継がれていたことがわかる。15~16世紀には一度、厭世地としてのイメージは認められなくなるが、17世紀に木下長嘯子が勝持寺に隠棲したことで再度詠まれた。これによって、厭世のイメージが再形成されることとなった。これらの和歌でも「山に入る」「浮世」などの表現が認められ、俗世から離れた山深い場所というイメージが読み取れる。

大原野周辺では、10世紀以降、大原野神社への信仰に関わるイメージと山深い野山のイメージが、松や山といった共通の景物や地名と結びついており、イメージが重ね合わされた。さらに12世紀以降、山を景物として、仏教的な厭世地としてのイメージも結びつけられた。いずれも寺社や野を中心とした山深い清浄な場所としてのイメージであり、これらのイメージが時代をこえて重ね合わされ、大原野周辺のイメージが形成・継承されたと言える。

(2) 長岡周辺

長岡周辺の、長岡、今里、向日明神、長岡天満宮では、(B-2) 山里の景物が、3つ以上の場所で詠まれた代表的なイメージとして認められた。

里や田を景物とし、「荒れにし」など荒廃した様子を表す表現を詠んだ和歌が12~13世紀に認められ、閑寂な山里のイメージが読み取れた⁴⁷⁾。平安京郊外の、平野部と山との間に村が点在していたために、都での生活とは異なる閑寂なイメージが詠まれたと考えられる。しかし、3つ以上の場所で詠まれたイメージは1種類のみであり、イメージの重ね合わせも目立ったものは認められないことから、領域としてのまとまりは弱くイメージは分散していると言える。

(3) 鳥羽周辺

鳥羽周辺の、鳥羽殿跡、秋の山、芹川、鳥羽、竹田、城南神社では、(A-2) 鳥羽殿の盛衰、(B-1) 田園地帯の景物、(B-1) 水郷の景物が、代表的なイメージとして認められた。

11世紀末に白河上皇が鳥羽離宮を造営し、以降(A-2) 鳥羽殿の盛衰のイメージを詠んだ和歌が、鳥羽殿跡を中心に、秋の山、鳥羽で認められた。鳥羽殿は、13世紀の承久の乱などを経て徐々に荒廃していくまでの間、鳥羽上皇や後鳥羽上皇など歴代の上皇の離宮として、権力や治世あるいはその衰退のイメージと結びつけて詠まれた。松や池、桜といった、鳥羽殿の庭園にあったと考えられる景物や、庭園から眺める月などを主に取り上げ、景物そのものが持つ長久さや美しさのイメージを用いて、

鳥羽殿固有の治世や権力のイメージが詠まれていた。一方で、「鳥羽」「鳥羽田」といった歌枕を詠む和歌は合わせて6首と少なく、地名とイメージとの結びつきは小さい。また、鳥羽殿の周辺の景物を取り入れた表現はあまり認められない。

また、鳥羽は風光明媚な水郷であったとされ、(B-1) その自然環境や生活のイメージが、11~14世紀を中心に和歌に詠まれていた。田を共通の景物として、「見渡せば」「行末とほき」と広い空間や眺望を指す表現を伴う広大な田園地帯としてのイメージと、「雲井飛ぶかりの羽風に月さえてとば田の里に衣うつなり⁴⁸⁾」のような、田園地帯の里の夜の営みのイメージが詠まれた。特に12世紀以降の和歌には「鳥羽田」を歌枕とする和歌が多く認められ、田が鳥羽周辺の代表的な景物として定着し、地名と景物、イメージとが結びついていたことがわかる。鳥羽の田園に関わる和歌が詠まれるようになるのは主に11世紀以降であり、鳥羽殿が造営され詠歌が行われるようになった時期と重なる。このことから、離宮の造営によって歌人らが鳥羽の自然に触れる機会が創出され、田園や水郷としての「鳥羽田」のイメージ形成に繋がったことが推察される。

鳥羽周辺では、歌枕「鳥羽田」や田園に関わる景物を通して、広大な田園のイメージとその中の里の生活のイメージとが、重ね合わされた。一方で、鳥羽殿には上皇らの盛衰のイメージが結びついていて、「鳥羽田」に関わるイメージとの重なりは小さかった。すなわち、鳥羽周辺にはこれらの2つの異なるイメージが認められる。

(4) 淀・八幡山周辺

淀・八幡周辺の、浮田の杜、水無瀬、狐川、美豆御牧、大荒木の杜、久我神社、淀川、淀、八幡山、関戸明神、山崎、相応寺では、(A-1) 八幡山への信仰、(A-3) 旅情・別れ、(B-1) 近世都市の景物、(B-1) 舟運に関わる景物、(B-1) 川辺の景物、(B-2) 杜の景物が、代表的なイメージとして認められた。

9世紀半ばに八幡山に石清水八幡宮が勧請されて以降、(A-1) 信仰のイメージが和歌に詠まれるようになり、特に12~13世紀に多くの和歌が認められた。八幡山は平安京にとって裏鬼門の方角であり、その地に勧請された石清水八幡宮への信仰は、鎮護国家の願いを含んだものであった⁴⁹⁾。和歌には神仏の象徴としての山や月、松といった景物が取り上げられた。なかでも「石清水きよき流れの絶えせねばやどる月さへくまなかりける⁵⁰⁾」のように、水や川と月とが取り合わされ、歌枕「石清水」の縁語として、祝賀の意味を持つ「澄む」「(流れが) 絶えぬ」などの表現を用いた信仰や慶賀の意が詠まれた。また、石清水祭では、放生川に魚鳥を放ち国家安泰を願う放生会が行われた。この行事も「川瀬にはなつよもの

鱗」などと和歌に詠まれ、八幡山における信仰と水や川とが強く結びついていたことがわかる。これらの和歌に詠まれた歌枕「石清水」「八幡山」「男山」はいずれも八幡山固有の歌枕であり、ほかの場所では詠まれていないことから、八幡山固有のイメージであったと言える。

また、淀や山崎、美豆御牧などは、山城国と摂津・河内国との国界に位置する西国交通の要衝であり、そうした立地とイメージの形成・変化の過程との関連を読み取ることができた。10-12世紀の和歌には、太宰府に左遷される菅原道真が「君かすむやとの梢をゆくゆくもかくるまてにかへりみしかな⁵¹⁾」と、都に残す人のことを偲び離別を悲しんだように、主要な津があった淀や山崎、平安時代初期まで関所があった関戸明神などにおいて

(A-3) 旅情・別れのイメージを詠んだ和歌が認められた。その後、12世紀以降には淀津が港湾・市場として著しく発展したとされ⁵²⁾、「淀の川舟」や「(舟を)ひく人」などの(B-1)舟運に関わる景物を詠んだ和歌が、水無瀬、美豆御牧、久我神社、淀、淀川、山崎で認められた。さらに近世に入ると、淀城の築城によって淀に城下町が形成され、八幡山下の橋本は街道の宿場として発展した。それに伴って17-18世紀には、八幡山や淀、大荒木の杜の民家や商家、水車などが景物として取り上げられるようになり、(B-1)近世都市としてのイメージが詠まれた。すなわち、交通の要衝という立地のもと、淀・山崎を中心に淀川舟運が発展し、近世には淀城下町や宿場町が形成された、その歴史的な変遷に伴って、取り上げる景物やイメージが変化したものと考えられる。

また、10世紀以降、「五月雨はみづのみまきのまこも草刈りほすひまもあらじとぞ思ふ⁵³⁾」などのように、あやめ草やまこもなどを主な景物として(B-1)川辺の植物や人々の生活に関わるイメージを川辺の景物に関わるイメージを詠んだ和歌が多く認められた。美豆御牧や淀、淀川を中心とした10の場所で認められ、淀川周辺の低湿地に広く共通するイメージであったことがわかる。また、「まこもかる淀の澤水深けれと底まで月の影はすみけり⁵⁴⁾」のように、月を川辺の景物として叙景的に詠んだ和歌も6首みられた。月と川や水との取り合わせは、八幡山の神仏の象徴として詠まれた景物でもあり、両方のイメージと結びついていたことがわかる。(B-2)杜の景物は、神社の杜特有の木々が詠まれ、主な景物・歌枕のいずれも他のイメージと共通点が少ないことから、神社の杜に固有のイメージと言える。

淀・八幡山周辺では、交通の要衝・国界であり水辺であるという立地や自然環境を背景としたイメージのまとまりやその時代変化を読み取ることができた。また、平安京の裏鬼門を守護する位置にあることを背景に、八幡山への信仰のイメージが、八幡山固有のイメージとして、時代を超えて詠み継がれた。これらのイメージは、共通

して川や水、月といった景物と結びついており、淀・八幡山周辺のイメージは、裏鬼門、交通の要衝、国界、川辺といった立地を背景としたイメージの重ね合わせがあったと言える。ただし、杜の景物は、こうした立地との関連が少なく、神社の杜特有のイメージが形成されていた。

5. おわりに

本研究では、近世の地誌・名所案内記中の和歌および近世の様子に関わる記述を対象に、代表的な場所の、1)景物やイメージに関わる表現、場所の歴史的・社会的文脈を把握した上で、それに基づいて和歌・記述を類型化し、和歌に詠まれた場所のイメージの特徴について考察した。さらに、2)場所間に共通して結びついたイメージを図化し、イメージの領域的なまとまりを把握した。加えて、イメージの時代変化を考察することで、京都西山地域において和歌に詠まれたイメージがどのように形成されてきたかを明らかにした。その成果は以下の通りである。

和歌・記述に詠まれたイメージは、場所とそのイメージや景物との間にどのような結びつきがあるかに着目すると、(A)寺社や離宮などの拠点・機能や、所縁のある故人に関わるイメージ、(B)土地固有の自然環境や生活に関わるイメージ、(C)地名からの連想に関わるイメージ、(D)眺望に関わるイメージ、の4つに分類できることを示した。和歌・記述に詠まれた景物やイメージは、場所固有の(A)寺社や離宮での営為、故人の詠歌、(B)自然環境や民衆の生活、(C)地名からの言葉上での連想、によって、特徴づけられていた。また、(D)眺望を通して、離れた場所の景物やイメージが取り合わされた。

場所間で共通して詠まれたイメージを地図上に示すことで、1)大原野周辺、2)長岡周辺、3)鳥羽周辺、4)淀・八幡山周辺において、複数の場所間で類似性・共通性をもつ、イメージの領域的なまとまりが認められたことを明らかにした。具体的には、1)大原野周辺では野の山深さ、3)鳥羽周辺では田園、4)淀・八幡山周辺では裏鬼門、交通の要衝、国界、川辺といった立地が、いくつかのイメージの背景に共通して読み取ることができた。さらに、こうした共通性を持ついくつかのイメージが、それぞれの自然環境に応じた景物を象徴として重ね合わされることで、まとまりごとに特有の景物と場所のイメージとの結びつきが形成されていた。

また、場所や歌枕、数の変化はあるものの、これらの領域内において、イメージの継承、再形成が認められたことを明らかにした。これは、ある時代のイメージが次

の時代のイメージに影響を及ぼしたものと考えられる。この時代を越えたイメージ形成の連鎖によって、領域的なイメージは強められ、地域イメージの形成に寄与したと考えられる。

謝辞：本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2110の支援を受けたものである。

補注

- [1] 旧乙訓郡は現在の、京都市の一部（大原野、久世、久我、羽束師、淀など）および、向日市、長岡京市、大山崎町の全域を含む地域である。
- [2] 「都名所図会」「拾遺都名所図会」の判読が難しい部分は、『新訂都名所図会』を参照した。（市古夏生、鈴木健一：新訂都名所図会 1-5、ちくま学芸文庫、1999）
- [3] 和歌の数は、同一の和歌が、複数の資料あるいは複数の場所で抽出できた場合の重複を除いた値である。記述に重複は認められなかった。
- [4] 本研究では、3つ以上の場所で詠まれたイメージに該当しないもののほとんどが、和歌・記述数が10首未満のものであった。そこで、10首以上に詠まれていたイメージは、3つ以上の場所で詠まれていなくても、多くの和歌に詠まれた代表的なイメージとして取り上げることとした。
- [5] 水無瀬は本来摂津国に位置しているが、今回対象とした名所地誌にも掲載されており、山城国の文化圏に含まれていたことがわかる。摂津名所図会には水無瀬殿の縁起や和歌もより多く引用されている。
- [6] 詠まれた歌合が特定できる場合は開催年を参照した。詠まれた年の特定が困難な場合は、作者が生きた期間が最も長い世紀を用いた。歌合・作者のいずれから年代が特定できない場合は表中の数からは除いた。
- [7] 時代ごとの和歌・記述数は、和歌文学自体の興隆・衰退などの影響も受けることから、必ずしも場所に対する関心の多寡と一致しないと考えられる。そのため本研究では、和歌・記述数の多少よりも、特に有無に注目して考察を行った。

参考文献

- 1) 竹尾利夫：万葉集の地名表現—歌枕化への諸相—，名古屋女子大学紀要 人文・社会編，Vol. 37, pp. 322-313, 1991.
- 2) 山本登朗：万葉集の地名表現—歌枕前史，pp. 21-35，歌枕を学ぶ人のために，世界思想社，1994.
- 3) 西田正憲：江戸後期における瀬戸内海の新しい風景視点の萌芽，ランドスケープ研究，Vol. 58, No. 5, pp. 33-36, 1994.
- 4) 山口敬太，出村嘉史，川崎雅史，樋口忠彦：近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究，土木学会論文集 D, Vol. 66, No. 1, pp. 14-26, 2010.
- 5) 菅井聡子：近世京都の名所案内記の順路設定にみる「洛中」「洛外」認識，日本建築学会計画系論文集，Vol. 69, No. 579, pp. 163-170, 2004.
- 6) 押田佳子，横内憲久，岡田智秀：十返舎一九「金草鞋」を通じてみた近世鎌倉観光における通過地点の景観構成とその観賞形態に関する研究，ランドスケープ研究，Vol. 73, No. 5, pp. 519-522, 2010.
- 7) 大竹芙実，山本清瀧，下村彰男：絵画にみる三保松

- 原と富士山との関係の変遷と現代の風景認識に関する研究，ランドスケープ研究，Vol. 80, No. 5, pp. 569-574, 2017.
- 8) 西邑雅未，黒田乃生：近世の絵画にみる筑波山の特徴，ランドスケープ研究，Vol. 79, No. 5, pp. 565-568, 2016.
- 9) 大平和弘，藤本真里，福本優，赤澤宏樹：絵画にみる鳴門海峡の風景認識の変遷に関する研究，ランドスケープ研究，Vol. 82, No. 5, pp. 457-462, 2019.
- 10) 石井悠加：鳥羽殿における詠歌史，東京大学国文学論集，Vol. 13, pp. 65-81, 2018.
- 11) 木村尚志：新古今時代の歌枕—「水無瀬」をめぐって，日本文学，Vol. 59, No. 12, pp. 12-21, 2010.
- 12) 野間光辰：新修京都叢書 1-22 巻，臨川書店，1968.
- 13) 小町谷照彦：古今集の歌枕—和歌表現論序説—，日本文学，Vol. 15, No. 8, pp. 24-32, 1966.
- 14) 日本国語大辞典第二版編集委員会：日本国語大辞典第二版，小学館，2000.
- 15) 久保田淳，馬場あき子：歌ことば歌枕大辞典，角川書店，1999.
- 16) 下中邦彦：京都市の地名，日本歴史地名大系第二七巻，平凡社，1979.
- 17) 下中邦彦：京都府の地名，日本歴史地名大系第二六巻，平凡社，1981.
- 18) 北住敏夫：名所歌の一考察—東北地方の歌枕について—，国語と国文学，Vol. 40, No. 11, pp. 1-13, 1963.
- 19) 前掲 13), p. 25
- 20) 片桐洋一：歌枕の成立—古今集表現研究の一部として—，国語と国文学，Vol. 47, No. 4, pp. 22-33, 1970.
- 21) 佐々木忠慧：歌枕の形成，pp. 264-267，論集和歌とは何か 第九集，笠間書院，1984.
- 22) 山本泰順：洛陽名所集，p. 478，新修京都叢書 11 巻，臨川書店，1658.
- 23) 前掲 15), p. 114
- 24) 前掲 15), p. 191
- 25) 平田英夫：神域の月の風景：中世神祇歌の表現史，日本文学，Vol. 51, No. 9, pp. 30-38, 2002.
- 26) 菅基久子：月と氷のシンボリズム—心敬の「えん」—，日本思想史学，No. 24, pp. 88-99, 1992.
- 27) 大島武好：山城名勝志，p. 285，新修京都叢書 14 巻，臨川書店，1968.
- 28) 前掲 27), p. 342
- 29) 前掲 10)
- 30) 前掲 15), p. 431
- 31) 不詳：名所都鳥，pp. 38-39，新修京都叢書 5 巻，臨川書店，1968.
- 32) 大島武好：山城名勝志，p. 301，新修京都叢書 13 巻，臨川書店，1968.
- 33) 白慧：山州名跡誌，p. 314，新修京都叢書 15 巻，臨川書店，1969.
- 34) 市古夏生，鈴木健一：新訂都名所図会 2, p. 305，ちくま学芸文庫，1999
- 35) 市古夏生，鈴木健一：新訂都名所図会 5, p. 150，ちくま学芸文庫，1999
- 36) 白慧：山州名跡誌，p. 11，新修京都叢書 16 巻，臨川書店，1969.
- 37) 前掲 35), p. 188
- 38) 前掲 32), p. 281
- 39) 前掲 15), p. 186

- 40) 前掲 15), p. 840
- 41) 前掲 27), p. 451
- 42) 前掲 15), p. 700
- 43) 前掲 32), p. 285
- 44) 前掲 32), p. 281
- 45) 前掲 16), p. 1143
- 46) 前掲 35), p. 135
- 47) 前掲 15), pp. 914-915
- 48) 前掲 27), p. 341
- 49) 前掲 17), p. 157
- 50) 秋里籬島：都花月名所, p. 562, 新修京都叢書 5 卷, 臨川書店, 1968.
- 51) 前掲 33), p. 344
- 52) 木村宏：淀津の盛衰と港湾機能の変遷, 人文地理, Vol. 8, No. 6, pp. 432-443, 1957.
- 53) 前掲 36), p. 16
- 54) 前掲 36), p. 15

(Received October 11, 2021)

(Accepted June 20, 2022)

THE STUDY ON THE NATURAL OBJECTS AND PLACE IMAGES OF NISHIYAMA, KYOTO, REPRESENTED IN WAKA POEMS FOCUSING ON THE REGION OF THE IMAGE

Ryo TANAKA, Keita YAMAGUCHI and Masashi KAWASAKI

This study aims to clarify the characteristics of natural objects and images in waka poems of Nishiyama, Kyoto, by focusing on the region of images. After extracting the natural objects in each place from the waka poems in the early modern guidebooks, we categorized and analyzed the characteristics of the image based on the contents of descriptions and the historical and social background of the places. Moreover, we analyzed the relationships among the images of each place and their changes over time, considering the similarity of the images and the proximity of the places. As a result, clusters of images with high similarity and commonality across several places were recognized. In the clusters, we recognized that the images were inherited and reproduced over the ages.